



オオタカはどんな鳥？

オオタカはタカ科ハイタカ属の中型タカ類です。全長約50cm(カラス大)。平地から低山地の林にすみ、森林と開けた場所の両方が見られる場所に生息します。肉食性で、他の鳥や小さな哺乳類(ネズミなど)を捕食します。1990年代には絶滅が危惧されていましたが、近年では分布を拡大し、都心でも繁殖が見られるようになりました。



園では8月になると親鳥、幼鳥ともに1度姿を消します。9月にオスと一部の幼鳥が戻り、水浴びをする姿などがしばしば確認されています。



1月から3月にかけて、求愛行動と並行して巣造りします。前年までの巣を使う場合も、新たに巣材をもってきます。



通常、4月から5月にかけて巣の中心に卵を産み、孵化するまで抱いて温めます。



卵を抱くのはほとんどがメス。オスはメスの分のエサも取ってきます。



幼鳥の姿。初めて巣の外へ出た後は段々遠くで過ごすようになり、やがて巣へは戻らなくなります。



産卵から40日程度で孵化。ヒナが大きくなるとメスも狩りに出かけるようになります。



自然教育園でのオオタカの繁殖

自然教育園で初めて繁殖行動が確認されたのは2017年のことです。この年は2羽のヒナが生まれるもすぐに消失してしまいましたが、以降は毎年成功し、2018年から2021年の4年間で8羽のヒナ(幼鳥)が巣立ちました。

オオタカの繁殖には、営巣できる大きな木のある森と周囲に狩りができる環境が必要です。6年間続けて繁殖行動が行われている自然教育園は、都心においてオオタカが繁殖できる環境を有するという点でも重要な緑地といえます。



2017年

初の繁殖行動。アカマツに巣を造り、ヒナが2羽生まれるもすぐに消失。



2018年

同じアカマツで再び営巣。特にトラブルなく2羽のヒナが巣立った。



2019年

同じアカマツで営巣するもカラスに巣を壊され、スダジイへ移転。その後は無事に2羽が巣立った。



2020年

続けてスダジイで営巣。4羽もヒナが生まれるも初期に1羽が死亡し(餓死?), 3羽が巣立った。



2021年

新しい巣を造るも放棄して元のスダジイ巣へ。他動物の襲撃があり、4羽中1羽のみが巣立った。



2022年

例年より3週間ほど早く産卵し、4卵を確認。4月27日に最初のヒナが誕生した。



オオタカの子育ても楽じゃない？

陸上の食物連鎖では頂点に位置するオオタカですが、その子育てには他の動物による邪魔が入ることがあります。園で見られた例をご紹介します。

カラスとの戦い

昔からカラスはオオタカ繁殖の障害として知られていました。大抵は生まれたばかりのヒナを襲うとされており、園でも2017年の繁殖失敗はカラスによるものと考えられています。

ただし、園では珍しい例として、なんと巣造り中の巣をカラスが壊しにきたことがありました(2019年)。十数羽のカラスが次々に飛来し、巣材の枝を持ち去っていき、親鳥の抵抗もむなしく最後には空になってしまいました。

近年では、対処法を覚えたのか繁殖期に巣に近づけることはほとんどなくなりました。しかし、特に都心で繁殖する以上、カラスとの戦いは今後も続いていくと思われます。



新たな脅威！？～深夜の襲撃者たち～

2021年に見られた新たな事例として、深夜にアオダイショウ、ハクビシンに続けざまに襲撃を受けたことがありました。夜中であまり見えないためか、追い出すのに苦労していたようです。映像を見る限りでは、捕食はされていないようでしたが、攻防で傷ついたのか、翌朝に4羽中3羽が消失していました。

また、ハクビシンは繁殖期だけでなく、その後も巣に度々入り込み、巣をためフン場にするなど繁殖に悪影響と思われる行動が見られました。



アオダイショウ(左)とハクビシン(右)

そこで、ハクビシンが木に登れないよう、営巣木と周辺の樹木にトタン板(プラスチック製の板)を隙間なく巻き付けました。つるつるとした素材のため、ハクビシンの爪が引っかからず登れなくなる仕組みです。

さらに、アオダイショウ対策も兼ねて巣のある木に伝わる低い枝の剪定も行いました。



登りこみ防止のトタン板設置

果たして今年はその成果がどう出るのか……？
無事に巣立つよう、見守っていただければと思います。



オオタカの繁殖生態

巣造り（求愛造巢期）

1月に入ると、オスとメスの両方が見られ、巣造りが始まります。巣の近くで求愛行動や交尾もするようになり、この時期を「求愛造巢期」と呼びます。

オオタカの巣は木の枝を組んで造られます。巣造りが進むと、マツやスダジイなど葉のついた枝(青葉)や木の皮(樹皮)を運ぶようになります。

青葉や樹皮は産座に敷き詰められ、卵やヒナを保護する役割とされます。

※ 産座：巣の中心で卵を産む場所



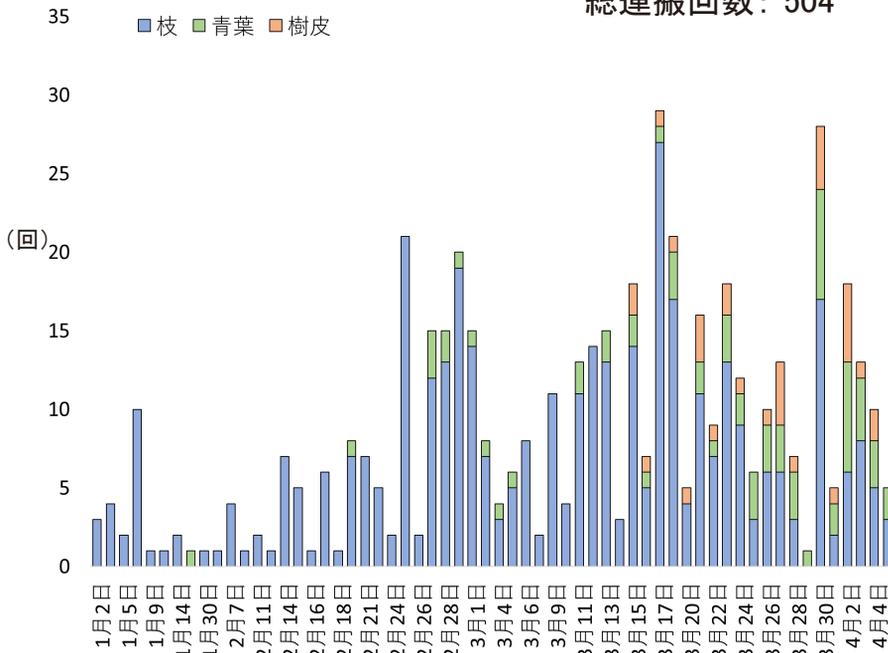
巣に青葉を運ぶメス

巣の移転等のなかった2020年では、1月1日から4月5日までに巣材が運び込まれたのはオス、メス合わせて504回で、そのうち80%が枝、14%が青葉、6%が樹皮でした。推移をみると、2月下旬から青葉の回数が増え、3月中旬から樹皮を運ぶようになったことがわかります。運搬の回数自体も後半になるにつれて増加傾向がみられました。

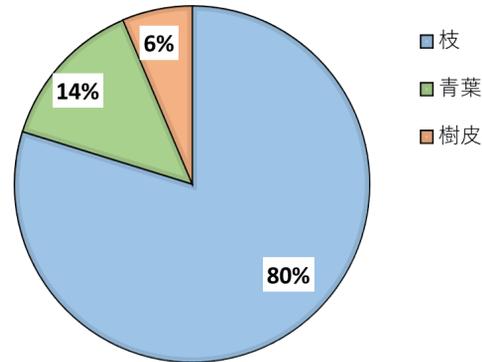
カラス襲撃により旧アカマツ巣から移転した2019年、途中まで新しく造った巣で抱卵していた2021年は巣材運搬の頻度がはっきりと少ない結果でした。このことから特に2019年に関しては、襲撃以前に本命、あるいは予備としてスダジイ巣を早々に造っていたことが考えられます。

巣材運搬の記録

総運搬回数：504



巣材別運搬回数の推移(2020年)



巣材運搬の内訳(2020年)

年	巣材運搬回数		
	1月	2月	3月
2019年 (旧アカマツ巣)	7回	19回	1回
2020年	26回	126回	304回
2021年	41回	23回	7回

年毎の巣材運搬回数比較



オオタカの繁殖生態

産卵と抱卵（抱卵期）

オオタカの産卵

通常、4月から5月にかけて最大で5卵まで産卵します。一度に産むのではなく、1卵ごとに数日の間隔があります。今回、2022年は例年より3週間ほど早く、3月20日夕方に1卵目が産卵されました。その後、24日に2卵目、27日に3卵目、29日に4卵目が確認されました。

各年の産卵日比較(一部推測含む)

年	各産卵日			
	1卵目	2卵目	3卵目	4卵目
2020年	4月6日	4月9日	4月12日	4月15日
2021年	4月10日	4月14日	4月17日	4月21日
2022年	3月20日	3月24日	3月27日	3月29日

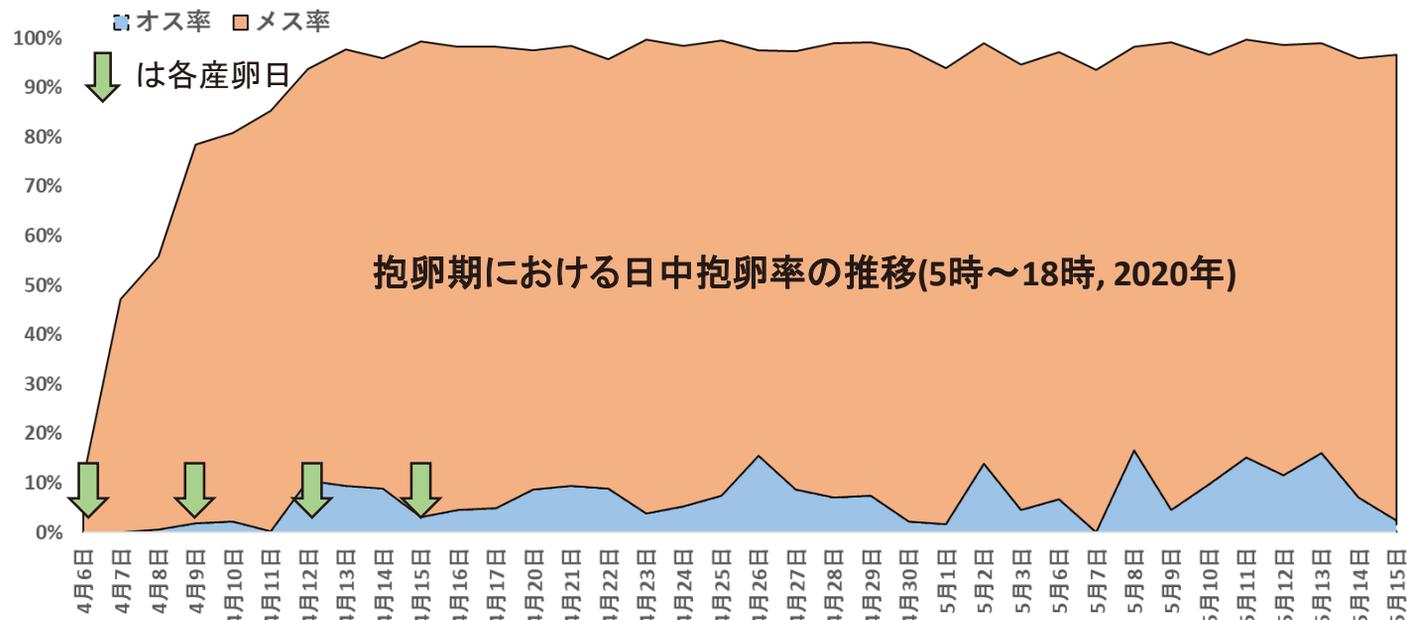


産卵後の巣内の様子

オオタカの抱卵

孵化するまではメスを中心に抱卵します(卵を抱いて温めること)。オスはメスの分の餌も狩りに行き、メスが餌を食べに離れた際には代わりにオスが抱卵することもあります。

日中の抱卵時間の割合(抱卵率)を見ると、1卵目の後は約50%で、2卵目の後(4月9日)は約80%、3卵目(4月12日)以降は約90%以上と産卵が進む度に抱卵率が高くなりました。この傾向は他の事例でも見られ、それぞれの卵の孵化日が大きくずれないように、初めの方に産んだ卵の抱卵時間を少なくして調整していると考えられています。





オオタカの繁殖生態

ヒナの誕生と成長（巣内育雛期）

1卵目の産卵から約40日後、最初のヒナが誕生します。ヒナは幼鳥となり、巣立てるようになるまでずっと巣の中で過ごします。

ヒナの誕生

園でヒナが初めて見られた日の間隔は、年によってまちまちですが、通常は1日ごとに生まれることが多いようです。なお、2021年は珍しく、一晩の間に2羽生まれたとみられています。生まれたばかりのヒナは小さく、外敵に狙われやすい危険な時期です。生まれてから2週間ごろまではメスはほとんど巣内におり、ヒナを抱いて守ります。

年毎のヒナの初確認日の比較

年	1羽目	2羽目	3羽目	4羽目
2019年	5月25日	5月28日		
2020年	5月16日	5月17日	5月18日	5月19日
2021年	5月20日	5月20日	5月21日	5月24日



生後5日(左) と 生後15日(右)のヒナ

ヒナの成長(2021年)



深夜の襲撃の翌日。3羽を失い、生き残った1羽の姿。



生後約10日。体が少し大きくなり、白い羽がくすんだ色に。



体の成長とともに脚の発達により、立ち上がるようになった。



白い産毛が落ち、幼鳥の羽が生え変わり始めた。



生え変わりが進み、大部分が幼鳥の羽になった。



巣立ちの準備運動か、羽ばたきを繰り返すようになった。



巣立ち間近。完全に幼鳥の姿となった。



巣立ち数日後。自分で餌を巣に運べるようになった。



オオタカの繁殖生態

ヒナの食事(巣内育雛期)

ヒナの食事の際、親は狩った獲物を巣に運ぶ前に別の場所で羽や頭などをむしり、ヒナが食べやすくしてからもってきます。

ヒナは成長するまでは自分で大きな餌を引き裂いて飲み込むことはできないため、親が餌を少しずつ口移しで食べさせます。

園内では生後3週間ほどから、時折、ヒナ自身で餌をついばむようになりますが、一つの餌を完全に自分の力で食べきるようになるのは巣立ち間近の時期です。

(この時期も親に口移しを受けないわけではありません)。



ネズミを運ぶメス

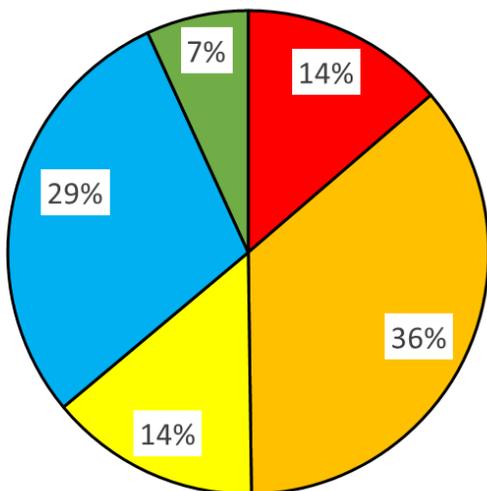
餌生物の内訳

餌生物の記録が得られた2020年と2021年を比較したところ、その内訳には違いがみられました。特に注目すべき点は、スズメ大の鳥類と哺乳類(ネズミ・モグラ)の割合の変化です。

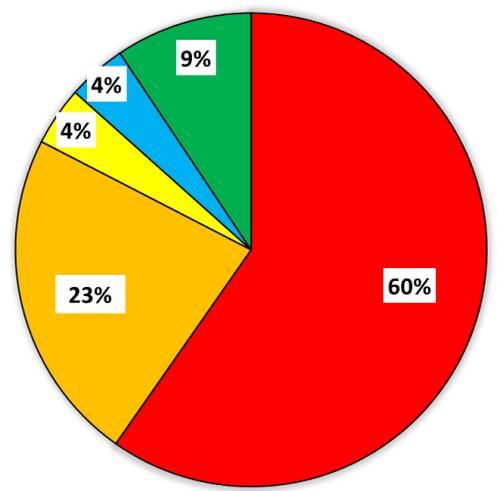
まず、2020年には少なかったスズメ大の鳥類が多くなったのは、2021年は4羽のヒナが途中で1羽に減ったため、必要な餌量が少なかったことが原因の一つと考えられます。

哺乳類の割合は2020年の29%から2021年は4%と明確に少なくなっています。ただし、2018年の園、および練馬区の記録ではいずれも哺乳類は全体の5%程度であり、2020年がむしろ特別多かった可能性があります。2020年の初夏は都内において、本来夜行性のネズミ類が日中に多く見られており、これは緊急事態宣言により飲食店一帯が臨時休業したことが原因と推測されています。このため、園周辺でも同様の現象が起きたことで日中にネズミ類が多く取れるようになり、一時的に割合が高くなったのではないかと考えています。

2020年 総運搬回数233回



2021年 総運搬回数144回



- 鳥類(スズメ大)
- 鳥類(ムクドリ)
- 鳥類(ハト以上)
- 哺乳類
- 判別不能

餌生物の内訳



オオタカの繁殖生態

巣立ちとその後(巣外育雛期)

誕生から約40日後、幼鳥(ヒナから成鳥までの中間)となったヒナが巣立ちします。この時期になると、体の大きさは親とほとんど変わりません。

オオタカの巣立ち

幼鳥になると、他の木の枝に飛び移るようになります。その後は徐々に遠くへ行くようになり、やがて巣には戻らなくなります。

巣立ち日についての定義は明確に決まっておらず、

- 巣から他の木の枝に飛び移った日
 - 一日の大部分を巣外で過ごすようになった日
- などが使われています。

幼鳥は1度に巣外に出始めるのではなく、最初の幼鳥から数日おきに出て、2、3羽の場合は全てが巣外に出るまでは4、5日かかります(2019年、2020年記録)。



幼鳥の枝移り

巣立ち後の親子

巣立ちの後は、親子とも時折巣に戻ることはありませんが、基本的には巣の外で生活します。

巣の外でもしばらくは親が面倒を見て、狩りのやり方などを教わりながら徐々に自立(独立)するようになります。

巣立ちから約1ヶ月後、独立した幼鳥は自分の縄張りを探しに旅立ちます。繁殖期が終わった後は親も巣には寄らなくなります。オスは行動範囲を大きく広げながらも時折繁殖した場所に戻ってきますが、メスは基本的に戻らず、別の場所で過ごします。

ただし、幼鳥の一部は繁殖した場所に留まり続けることもあるようです。園ではここ2、3年は9月以降、幼鳥1羽がオスの親とともに見られ、池で水浴びをする姿などがしばしば目撃されています。

このため、繁殖が終わった後も運がよければ、園内でオオタカの親子を見ることができるともかもしれません。



オスの水浴び



マツの枝にとまる幼鳥

企画展

2022 オオタカの子育て を観察しよう！



2022年



2018年



2020年

自然教育園に生息しているオオタカの子育てを[ライブ中継](#)で公開します！
2021年子育てのダイジェストビデオもご覧いただけます。

※ ヒナが巣で見られなくなった場合、ライブ中継は終了となります。

憲法記念日

- 会 期 2022年5月3日(火)～6月30日(木)
- 開園時間 9:00～17:00 (入園は16:00まで)
- 休園日 毎週月曜日
- 入園料 320円

(高校生以下・65才以上・障害者の方とその介護者1名まで 無料)

お問合せ：国立科学博物館附属自然教育園 東京都港区白金台5-21-5 TEL.03-3441-7176

天然記念物及び史跡

科博 自然教育園 港区白金台



国立科学博物館
National Museum of Nature and Science

本作は、2022年5月3日～6月30日の期間、
国立科学博物館附属自然教育園にて開催された
企画展「2022自然教育園オオタカの子育て観察しよう！」
の展示パネルをデータ化したものです